



IBOKIN ANNUAL REPORT 2022

www.ibokin.co.jp



資源を活かす技術で、 社会を創りなおす。

SDGsに包含されるさまざまな社会課題、そこで語られる気候変動への対応。
今でこそ、すべての企業がテーマに掲げて取り組んでいるテーマですが、
イボキンにとっては、これまであたりまえのように考え、実践してきたことにほかなりません。
今、社会が求める、この資源を循環させる技術こそ、イボキンが長年磨き上げてきたものなのです。
そんな私たちの考え方、事業内容、事業の成果を、しっかりと伝えていくため、
イボキンは、今春、ロゴマークを一新、新たなブランドメッセージとともに発信していきます。
新たなブランドメッセージは「資源の一生に、夢と責任。」というものです。
これまで磨いてきた技術で、資源の開発から再資源化までを責任をもって、
一貫して行うという自覚と誇りを抱き、新たな社会を創造していくイボキンにご期待ください。

代表取締役
Katsumi Takahashi

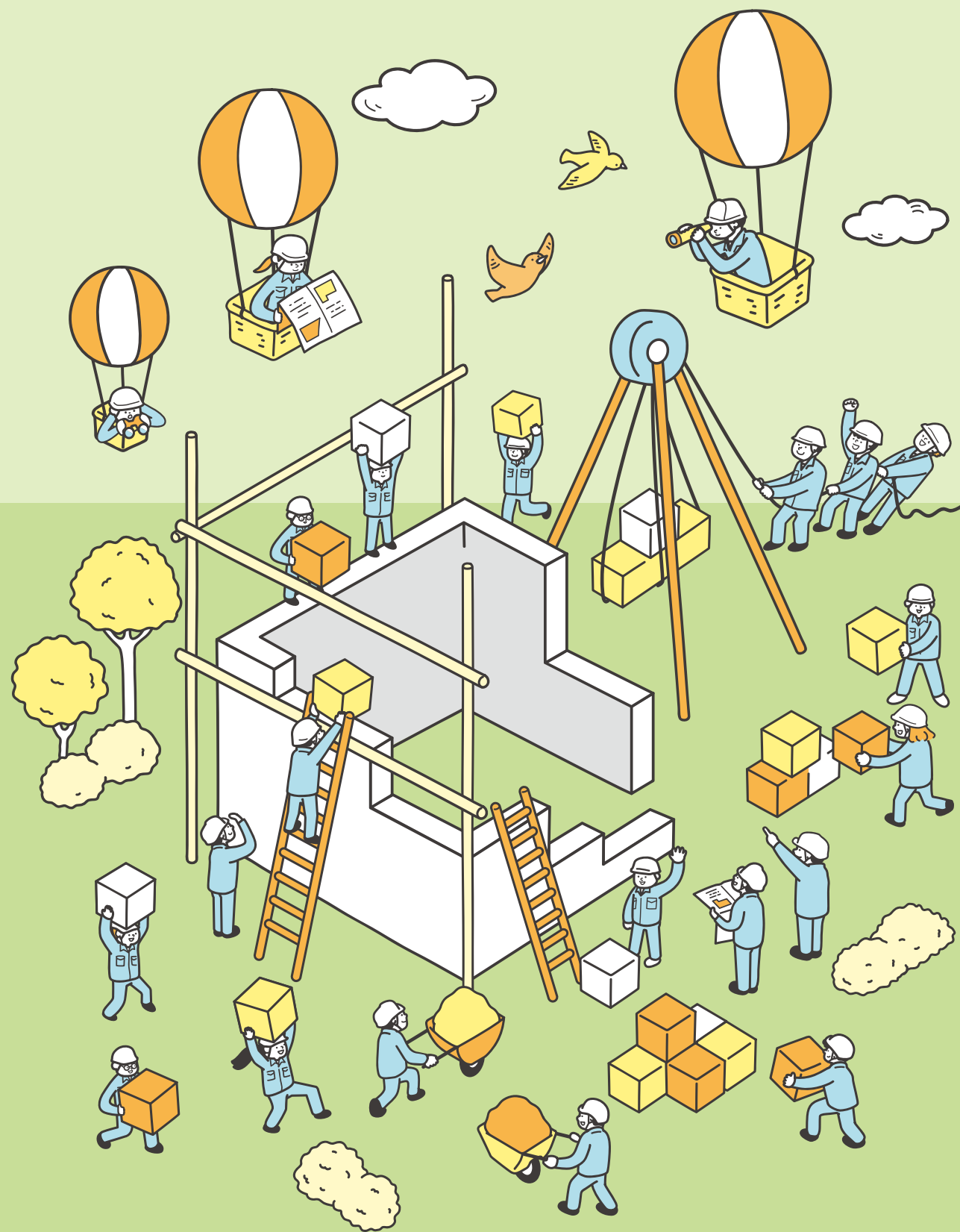
高橋克実

C O N T E N T S

Top Message	代表メッセージ	001
ibokin BRAND	イボキンブランド	003
Business Field	事業領域	009
Cross Talk	社長対談	017
Sustainability	イボキンESGへの取り組み	021
Financial report	財務報告	025
Number	数字で見るイボキン	027
Information	会社概要	028
History	沿革	029

TOP MESSAGE

私たちがずっと大切にしてきたことを礎に、
イボキンブランドの確立へ。



1973年の創業以来、一貫してリサイクルに取り組んできた私たちイボキン。

日本の高度成長期に生まれたビルやプラント、大型設備など、

都市にストックされた膨大な資源を循環させることで、工業、産業に貢献し、

わが国の発展に繋げていくという気概を持って取り組んでまいりました。

常に挑戦と失敗を繰り返しながら発展してきた、

その礎となってきたのが「会社憲法」です。

苦労や困難に直面するたび、この原点に立ち返り精進してきたからこそ今があります。

「会社憲法」を胸に、具体的に行動し、

時代に求められるミッションを成し遂げていくことで、

社会に認められ存在価値のあるイボキンでいつづけられると考えています。

これまでも、これからも、すべての事業活動は、

この「会社憲法」「企業行動憲章」を普遍的な財産として抱きすすめてまいります。

PHILOSOPHY 会社憲法

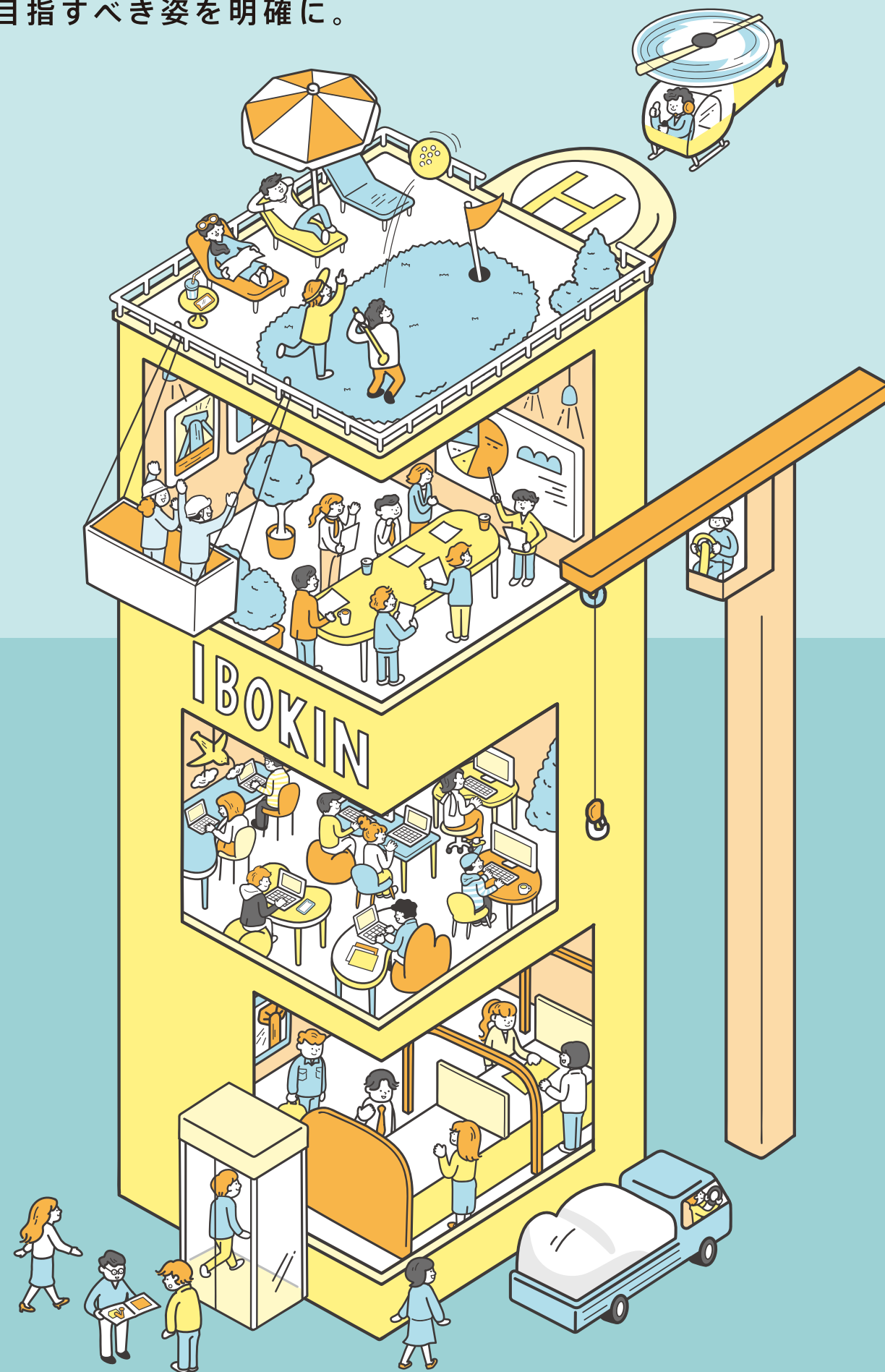
社会の平和と発展を願い、お客様の喜びと社員の物心両面の幸福を追求する。
そして明るく積極的に活動し、堅実な経営を行う。

- 01 常に明るく感謝の気持ちを持って誠実に徹する。
- 02 仕事を通じ人間性を高め、すべての行動に品格を伴う。
- 03 きょうより今日、今日より明日へと常に改善し創意工夫を重ねる。
- 04 思いやりのある気さくなサービスで、すべての人をお客様として大切にもてなす。
- 05 技術力、ノウハウ、安全性を高め日本を代表する総合リサイクル企業を目指す。

ACTION 企業行動憲章

- | | | |
|------------------|----------|-----------|
| ◎自覚・責任 | ◎人権の尊重 | ◎顧客満足 |
| ◎説明責任・透明性 | ◎雇用・労働 | ◎情報管理 |
| ◎法令等の遵守と公正・公平・誠実 | ◎環境・安全 | ◎コミュニティ貢献 |
| ◎ステークホルダーの尊重 | ◎公正な事業慣行 | ◎規範の共有 |

私たちの強み、イボキンを見つめなおし、
目指すべき姿を明確に。



気候変動問題や資源枯渇問題をはじめ、
持続可能な社会づくりのためのSDGsが世界的なテーマとなる中、
私たちリサイクル産業が担う役割は、さらに大きくなりつつあることを認識しています。
イボキンは、今、それら山積するさまざまな社会課題と真摯に向き合い、
地球の豊かな未来に向け、
どのような存在であるべきかを今一度考える必要がありました。
この時代の課題に応えるために、私たちが持つ人的、物的資源、
これまで培ってきた知見やノウハウを活かし、私たちには何ができるのか、
何を身につけ、どう行動すればよいのかを全社一丸となり徹底的に見つめなおしました。
そして、導かれた私たちの目指すべき姿、あるべき姿を明確化し、
イボキンコーポレートブランドとして、広く社内外へと発信していくことにいたしました。

IBOKIN VALUE

｜組織力｜

- ・リサイクル企業のリーディングカンパニーを目指す姿勢
- ・積極的な設備投資の推進
- ・「お客様第一主義」をベースとした行動力
- ・事業の垣根を越えた提案力
- ・社会貢献への積極的な取り組み
- ・やりたいことに挑戦できる環境
- ・地域に根付いた事業内容

｜スキル・技術力｜

- ・幅広いリサイクルへの対応
- ・解体、産廃、スクラップをワンストップで請け負える体制
- ・最終処分まで行えるノウハウと保有施設
- ・高度な重機の保有
- ・解体ゼネコンを目指す意志力
- ・きめ細かな対応力

｜社風・メンタリティ｜

- ・確かな人間教育・人材育成を行う環境
- ・社員交流も多い活気のある風土
- ・働きやすい職場環境への改革推進
- ・上司・社員間の円滑なコミュニケーション
- ・チャレンジングな人材の活躍
- ・確かな仕事を支える「職人気質」

BRANDING PROCESS

STEP1 INTERVIEW

高橋社長、イボキン社員15名、取引先4名へのインタビューを実施。お聞きしたすべての言葉を整理し、象徴的なキーワードを抽出しました。

STEP2 SURVEY

インタビューから抽出したキーワードについて、イボキンらしさといえる因子を見つけ出しました。

STEP3 WORKSHOP

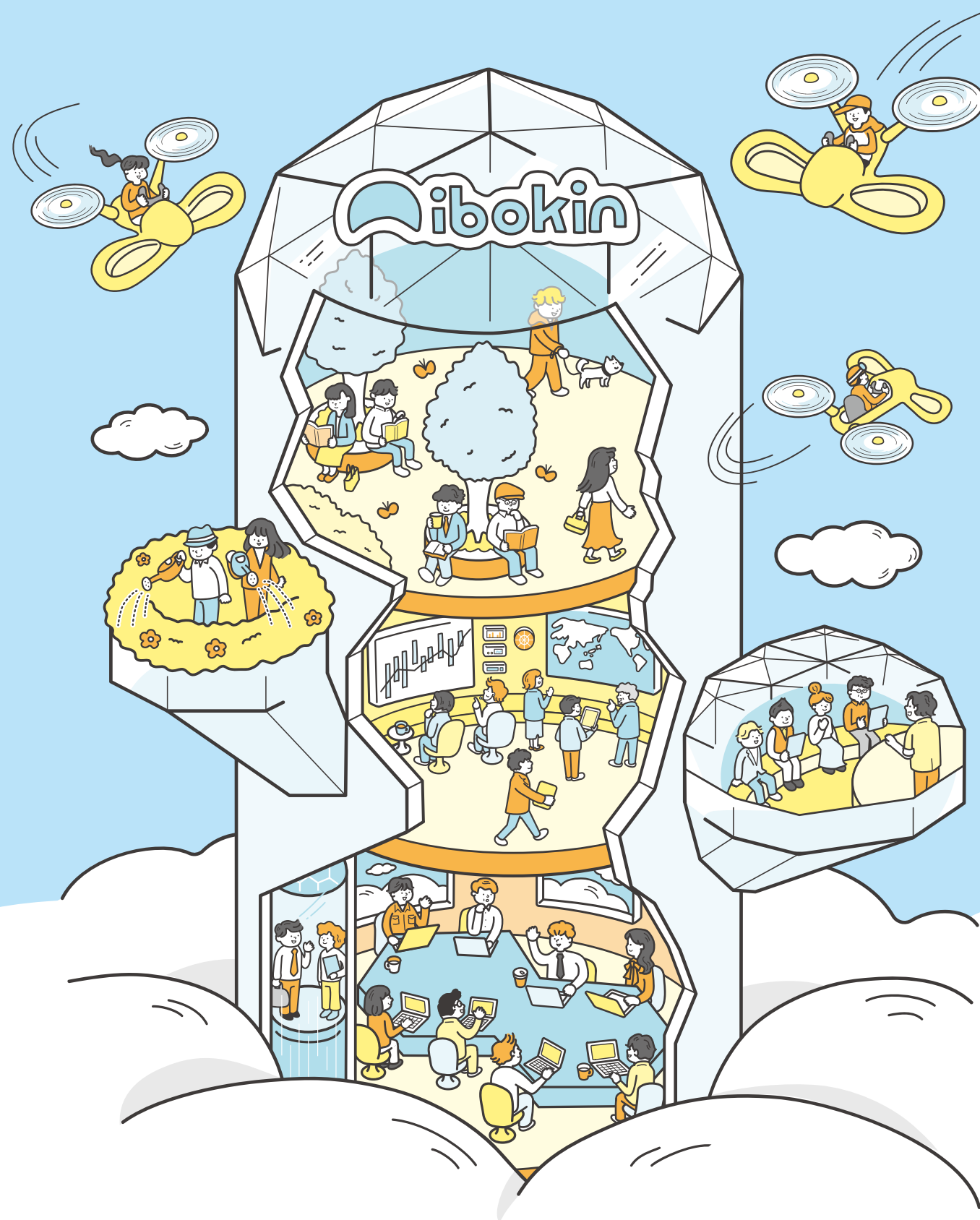
社長以下約20名のブランディングチームでワークショップを実施。イボキンの提供価値、アイデンティティなどについて議論を重ねました。

STEP4 VISUALIZE

中長期計画も視野に入れブランドコンセプトを策定し、新たなスローガンを開発。イボキンの目指すべき姿を言語化しロゴマークも一新しました。

もっと、社会の未来のために。2023年4月。

新たなスローガンとロゴマークとともに歩み始めます。



コーポレートブランドとは、

イボキンと関わるすべてのステークホルダーの皆様との約束です。

私たちが信頼し、期待を寄せていただける皆様に向けたメッセージとして、

スローガンを「資源の一生に、夢と責任。」と決めました。

一新したロゴマークは、イボキンが位置する「揖保」の地名の由来とも言われ、

播磨風土記にも登場する「粒丘(いいほおか)」の容姿をモチーフにデザイン。

イボキン本社にもほど近い「粒丘(いいほおか)」を背景にしたこの地で、

播磨からさらに躍進していく意志を、日が昇っていく表現と重ね合わせながら示しています。

新たなスローガンとともに、日本一のリサイクル企業を目指すイボキンにご期待ください。

資源の一生に、夢と責任。

都市には、役目を終えた多くの宝が眠っている。

建物やプラントをはじめ、機械、自動車、家電など、
高度経済成長期以降の
日本が産んだ無数の主役たち。

そんな資源の一生を、ここで終わらせる訳にはいかない。

再び、新たな夢を実現する源として、
さらに価値のある生涯へとバトンをつなげたい。

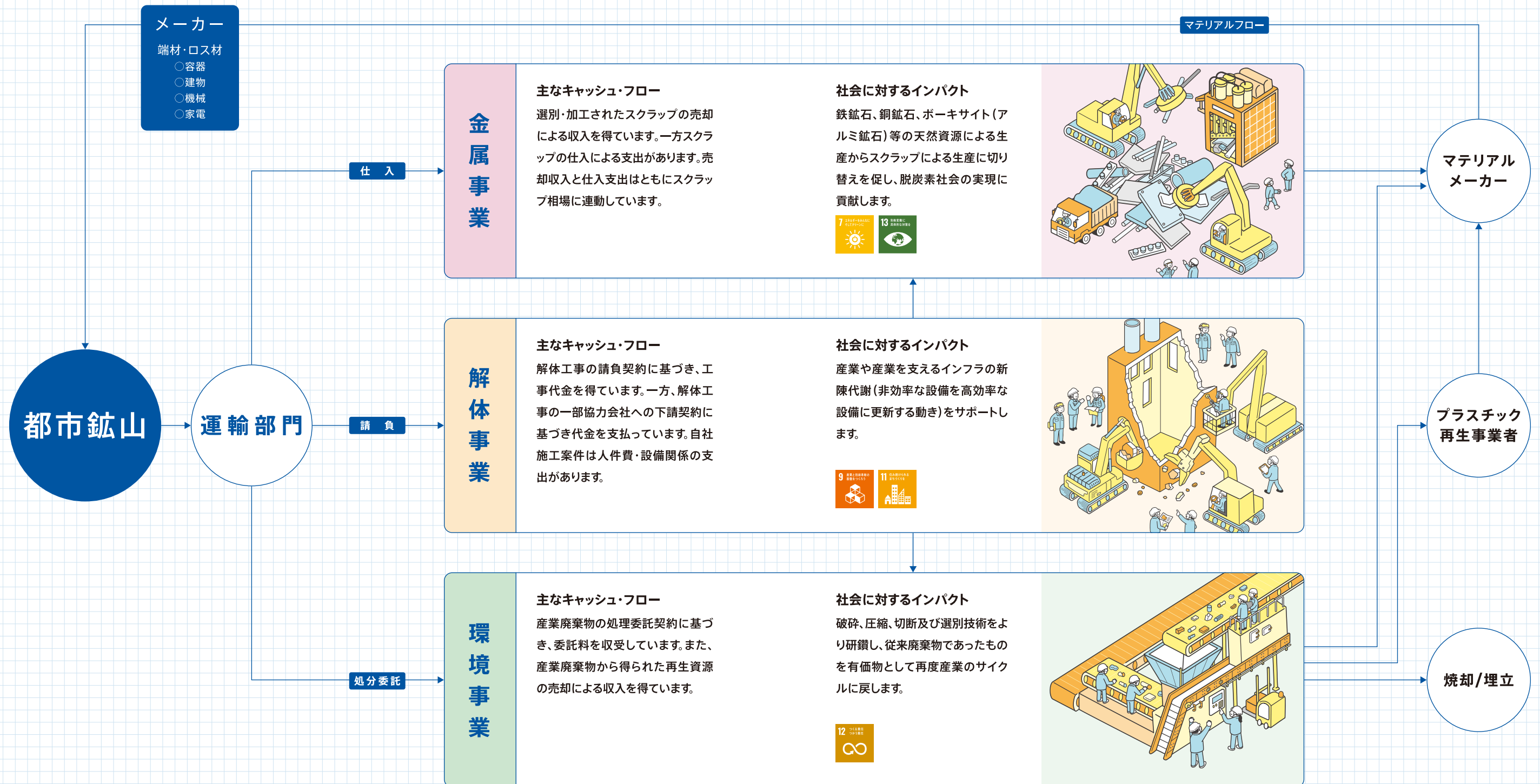
高いコンプライアンス意識で
解体からリサイクル処理までを責任を持って行い、
次世代の資源として必ず救い出す。

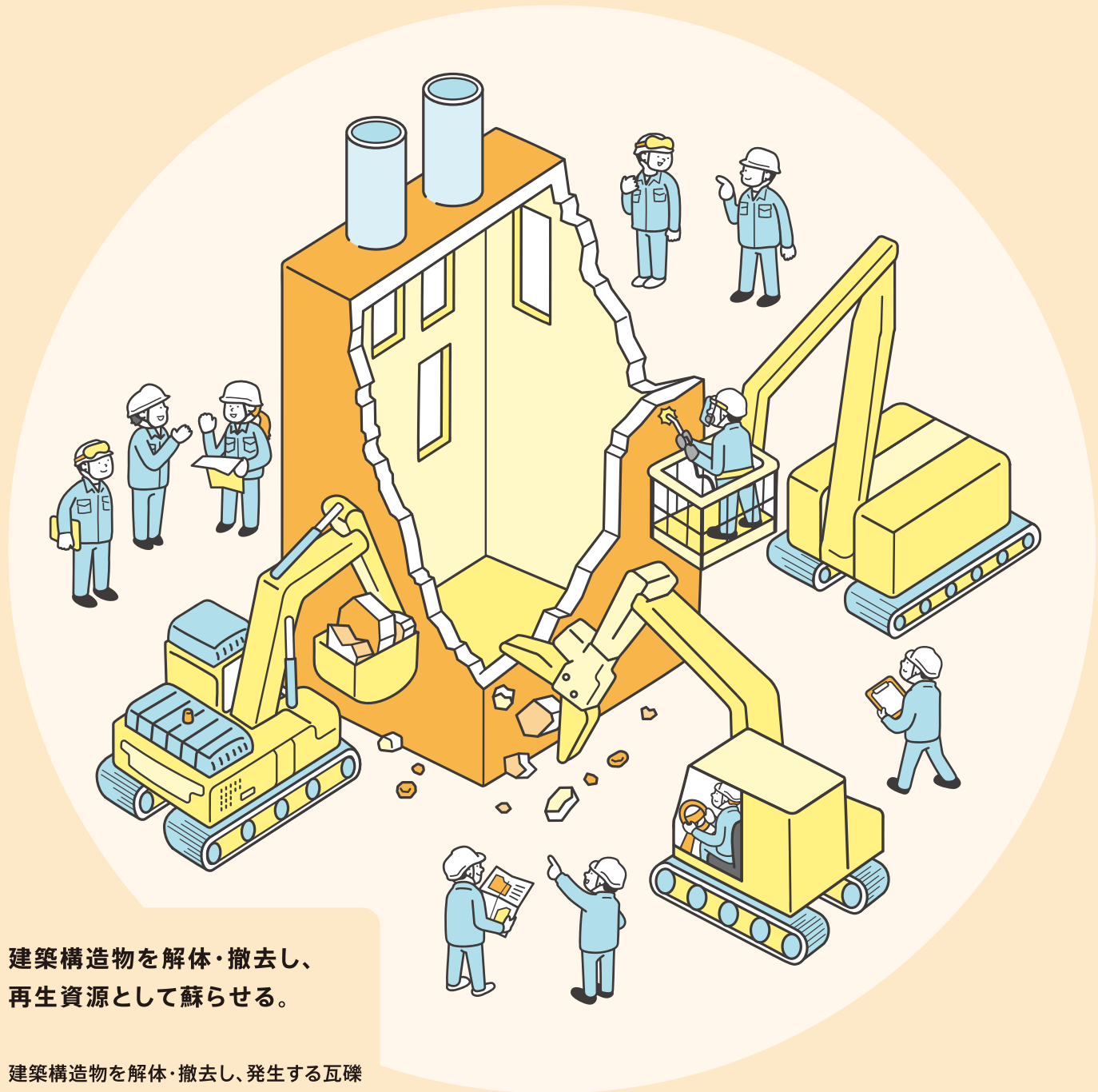
新しい循環型社会をリードする強い覚悟を胸に、
イボキンは、今日も、
サステナブルな世界の実現に貢献します。



イボキンを支える 3つの事業

今後は解体工事のニーズが高まると予想されるため、解体事業を成長エンジンと位置付けています。
また、環境事業、金属事業とのコラボレーションにより、
お客様のお困り事に総合的にソリューションを提供する機能に磨きをかけてまいります。
そのためには優秀な人材の確保と育成が課題となりますが、
一層働き方改革を推進させ、従業員のポテンシャルをより引き出す環境を整備してまいります。





建築構造物を解体・撤去し、
再生資源として蘇らせる。

建築構造物を解体・撤去し、発生する瓦礫などの産業廃棄物を自社中間処理工場で建築資材などの再生資源に、鉄や非鉄などの金属類は別途自社金属加工工場で選別・加工を行い、金属再生資源としてリサイクルし循環させ、当社環境事業と金属事業とのシナジーを活かしたサービスを提供しています。バックアップとしての環境保全機能を持つことで、広範な安心・安全という付加価値を提供しています。解体事業は成長戦略のエンジンであり、市場規模拡大に応じて陣容を拡大させていきます。

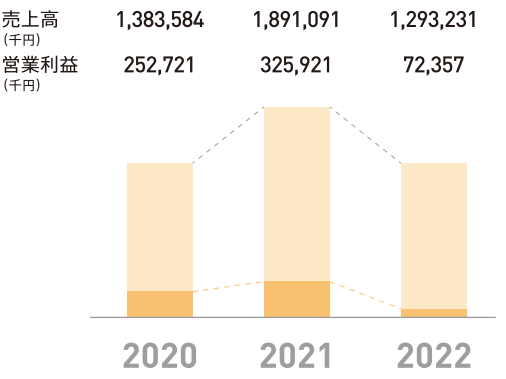
Dismantling business

解体事業



2022年度の経営成績

解体工事については、完工件数は226件とやや増加しましたが、そのうち大型案件は10件となり前年度を下回りました。前年度は高利益率の大型案件の収益が相次いで認識されましたが、当年度は新しい地域・業種の解体案件に参入するために利幅を抑えた受注を行ったことや、一時的に進行中の案件数が低水準となったため見積もり時に想定したよりも配分される間接費割合が増加したことで利益率が低下しました。これらの結果、売上高は1,293,231千円(前期比31.6%減)、営業利益は72,357千円(同77.8%減)となりました。



INTERVIEW

生産性向上へDXを推進、
解体工事事業を「知識集約型産業」へ。

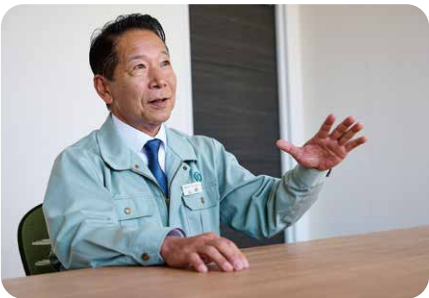
1955年から始まった日本の高度経済成長期には、膨大な数の工場や倉庫、ビルなどが建設されました。それらの建築物は50年以上の時を経て順次解体されつつありますが、その規模は当時の経済成長を反映して、年々大型化、高層化、複雑化してきています。

また、それらの建築物の中には、数多くの産業機械、医療器械、電気設備や様々な製造ラインなどが眠っています。まさに天然の鉱山にも勝る資源の宝庫である莫大な都市鉱山が姿を現しつつあると言っても過言ではありません。さらに、日本の各地域において、太陽光発電や風力発電などの再生可能エネルギー設備や施設の更新等も順次実施される計画がなされており、今後生じてくる多種多様な新たなニーズに対応するために、私たちイボキンググループは、グループ会社である国徳工業と共に、有資格者を含めた陣容をさらに充実させてまいります。

また、超大型解体専用重機を導入するなど機械化を推進し労働安全性と生産性を高めてまいります。さらに、DX推進の取り組みとして、最先端のセンシング技術を取り入れ、設計・施工計画作成時の生産性を飛躍的に向上し、解体工事事業をより知識集約型産業へと変容させるべく推進してまいります。

地域戦略においては、全国規模での活動の場をさらに

広めて、事業規模を拡大していきます。解体工事から発生する様々な有用資源や産業廃棄物をムダにしないために、解体工事を成長エンジンとしつつ、鉄や非鉄等金属資源リサイクルを実業とする金属事業部門、ならびに産業廃棄物の中間処理・リサイクルを主たる業務とする環境事業部門とも緊密に有機的な連携を実践することによって、各事業が培ってきた豊富なノウハウと同業他社との全国ネットワークを活かした事業を展開し、都市鉱山開発企業として、サーキュラー・エコノミー社会実現の一翼を担うべく挑戦を続けていきます。



山崎 喜博

Yoshihiro Yamasaki
常務取締役 解体事業部長 兼
株式会社国徳工業 代表取締役

Environmental business

環境事業

産業廃棄物を選別・加工を施し再生資源として販売する。

産業廃棄物収集運搬及び中間処理並びに再生資源販売を中心に事業を展開しています。製造業、建設業の顧客から廃棄物や使用済みの機械類を運輸部門が収集し、処理受託手数料を得ています。そして選別・加工後、再生資源として販売します。近年、小型電子機器などの金属系産業廃棄物が増える中、2019年、本社工場の大型破砕機を最新鋭の設備に更新、翌年には選別設備を更新しました。排出事業者様のニーズにお応えするとともに、環境保全への社会的責任を果たしていきます。

Transportation department

運輸部門

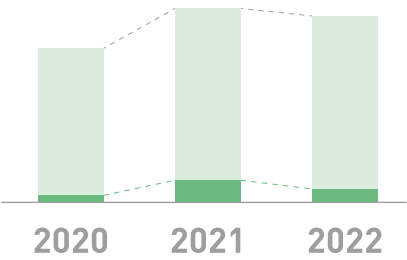
産業廃棄物やスクラップを収集・運搬する。

当社グループの運輸部門は、廃棄物、スクラップを仕入先から回収、及び顧客への納入を担っています。社内に物流機能を有することで、当社工場が工場地域から離れた場所に立地している弱みを補い、さらに、営業能力を併せ持つドライバーを動員していることから、顧客情報の収集など、強力な営業支援機能を有しています。

2022年度の経営成績

産業廃棄物処理受託の取扱量は22,067トンに減少し、再生資源販売の取扱量は14,625トンに増加しました。世界的な半導体不足、物価上昇、及び国際紛争等を背景とする経済の停滞を受け、企業の生産活動由来の廃棄物が減少したことにより取扱量が減少しました。相場が上昇したことで再生資源販売は増加しましたが廃棄物処理受託は取扱量の減少のほか、新収益認識基準の適用の影響もあり減収となりました。これらの結果、売上高は1,725,941千円(前期比3.8%減)、営業利益は146,050千円(同33.0%減)となりました。

売上高 (千円)	1,425,793	1,794,939	1,725,941
営業利益 (千円)	47,334	217,858	146,050



INTERVIEW

SDGs、脱炭素に向けた取り組みへ、固定観念にとらわれない積極的な挑戦を。

現在、環境事業に伴う市場環境は大きなうねりの中にあります。

世界的にはSDGsへの取り組み、温暖化対策のため脱炭素に向けた目標設定とそのための施策があります。またロシアのウクライナ侵攻など地政学的な問題による、資源高、資源不足、食糧不足や政策金利が原因となる円安によりインフレが起こっております。

このような中、廃棄におけるコスト削減はもとより、生産活動にともなう廃棄物の削減、資源化によるリサイクル率の向上、水平リサイクルだけではなく、そのプロセスにおける二酸化炭素の排出量の削減を、従来よりも大きく求められる時代となっており、静脈産業に対するニーズや期待が高まっていると認識しています。

当社においては、世の中、お客様のニーズにお応えすることができるように、既存事業のブラッシュアップを図ることはもちろんですが、新規事業所の開設による事業規模の拡大、市場で要求されるリサイクル技術の開発などによる事業領域の拡大、全国の優良業者で構成されるネットワークを活用したソリューションビジネスの拡大や、サーキュラーエコノミーの中での脱炭素への取り組みやDXの仕組みの構築など、業界の固定概念にとらわ

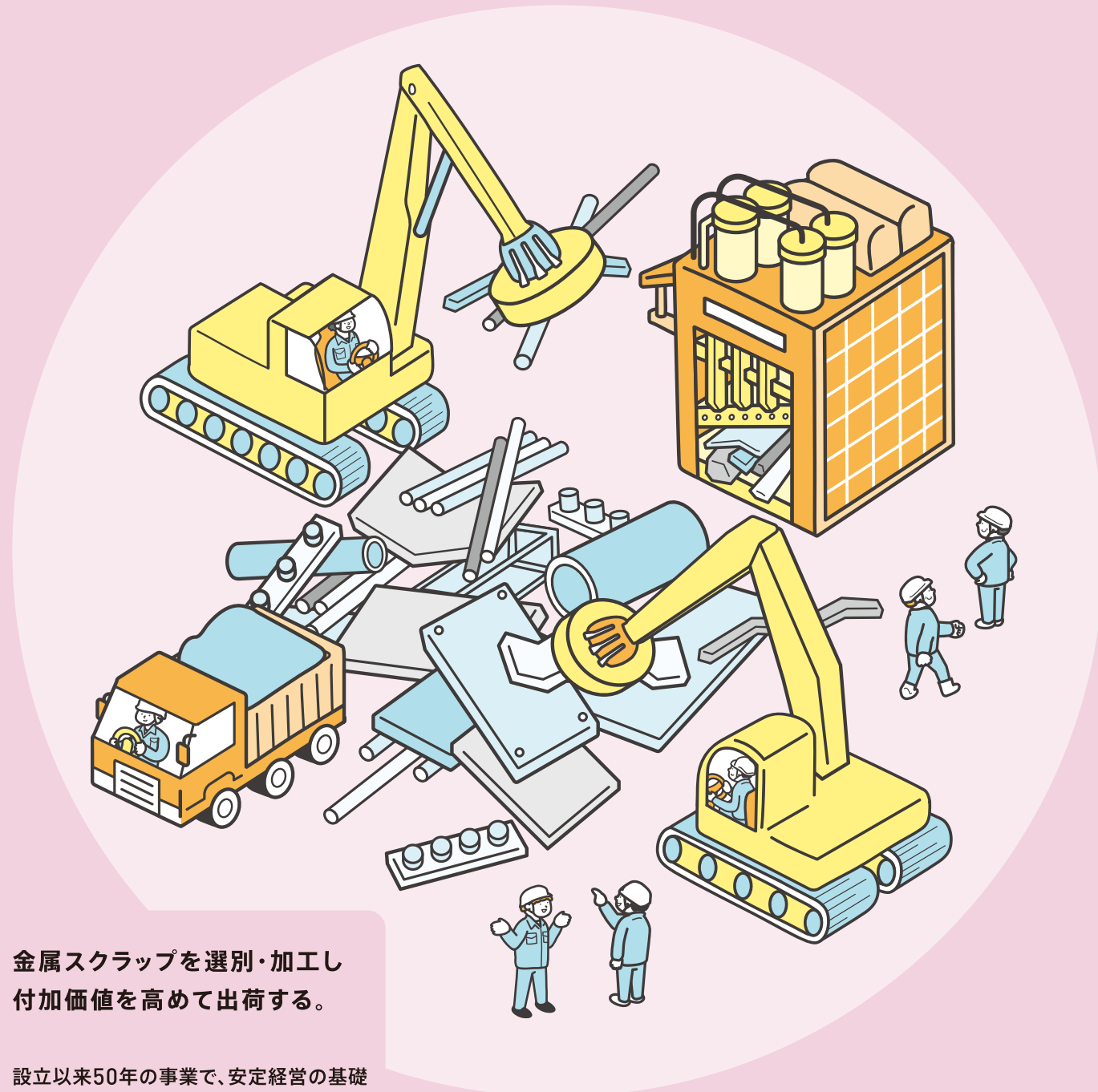
れずに積極的なチャレンジを行っていきたいと考えております。

また労働力不足が将来のリスクとして顕在化しつつある中で、生産活動における省人化、生産性向上、労働安全衛生の向上を目的として、AIを活用した機械化、IoT、採算管理ツールの導入についても産学官連携の上、積極的に進めてまいります。



村谷 厚治

Kouji Muratani
執行役員 環境事業部長



金属スクラップを選別・加工し 付加価値を高めて出荷する。

設立以来50年の事業で、安定経営の基礎となっています。産業活動から発生する金属スクラップを仕入れ、自社工場にて選別加工、付加価値を高めて電炉など鉄鋼メーカーに出荷することで100%リサイクルを達成しています。当社はスクラップ発生元とのネットワーク、スクラップの目利き能力、重機・大型設備・ガス等による切断技術に強みがあります。スクラップの相場変動による影響を受けますが、仕入～販売の加工工数を短縮し、変動の影響を最小限に抑える事業運営を推進しています。

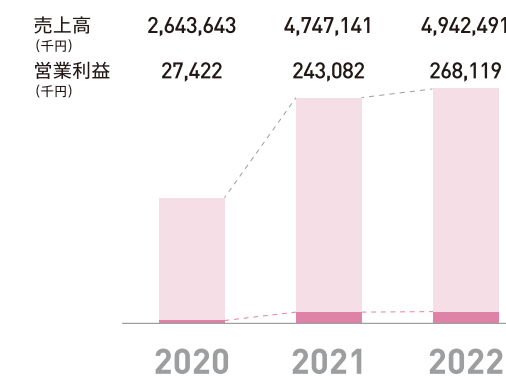
Metal business

金属事業

03

2022年度の経営成績

スクラップの取扱量は59,415トンに増加しました。鉄スクラップ等の相場については、当年度の上期に一時高水準となった後、下期は横這いとなりましたが、平均単価で前年度を上回ったことで増収となりました。また、スクラップの処理工程の改善によって、雑品類から高品位のスクラップを取り出すことができるようになったことが増益につながりました。これらの結果、売上高は4,942,491千円(前期比4.1%増)、営業利益は268,119千円(同10.3%増)となりました。



INTERVIEW

加工工場、営業所の新設も視野に、 取扱商品の拡大、ニーズに応える体制づくりを。

昨今、世界的に脱炭素社会への取り組みが加速しています。鉄鋼製品の製造において、高炉に比べ二酸化炭素の排出量を大幅に削減できる電炉へ切替える動きが鉄鋼メーカーから相次ぎ発表されています。

海外に比べ、我が国の電炉比率はまだ低い水準であることから、今後、電炉への切替えの傾向は続き、電炉比率は伸びてくると見られます。

電炉メーカーの原料である鉄スクラップもこれまでの単なる原材料としての位置づけから、カーボンニュートラル実現のための存在として価値観が大きく変わってくるでしょう。今後、我が国の電炉比率が上昇することで鉄スクラップの需要が増え、これまで輸出国であった日本からの鉄スクラップ輸出がなくなることもあり得ます。

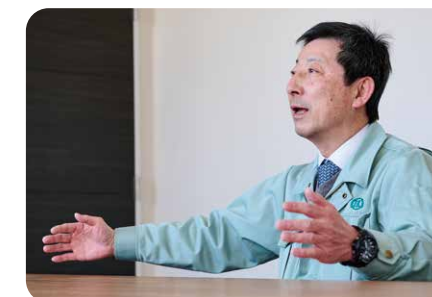
世の中の変化は激しく、また複雑性も増えています。この変化に対応するには既存事業だけに捉われず新たなものへ積極的にチャレンジすることが必要です。

金属事業部では、スクラップ加工の主力工場である龍野工場において2022年に産業廃棄物処分量の許可も取得しました。今後は顧客開発を進捗させ取扱商品の幅を拡大し、お客様ニーズにお応えしてまいります。

また、近年は産業廃棄物業界のみならず金属リサイクル企業に対してもリサイクル率の数値化と開示が顧客か

ら求められる傾向が広まりつつあります。排出者である顧客が求める適正処理とともに、情報開示を行うことによって安心して任せてもらえるようになれば参入障壁を引き上げることに繋がると考えております。

さらに、スクラップを輸送・一時貯蔵するための中継ヤードや、加工工場、営業所を新たに開設することも検討しております。また全国の協力業者のネットワークを活用したワンストップ・サービスをさらに拡充し顧客満足につなげてまいります。



高橋 守

Mamoru Takahashi
取締役 金属事業部長

CROSS TALK

リサイクル業界が、
持続可能な世界をつくる
リーダーになる。

PROFILE

株式会社イボキン
代表取締役

高橋 克実
Katsumi Takahashi



PROFILE

株式会社中特ホールディングス
代表取締役

橋本 ふくみ
Fukumi Hashimoto

廃棄物収集運搬業をはじめ、中間処理、リサイクル、解体業、遺品整理事業などを手掛ける5社からなる中特グループ。「生活環境革命で人々を幸せにする」を使命として、生活環境のお困りごとの解決に取り組んでいる。経済産業省・中小企業庁選定「がんばる中小企業・小規模事業者300社」にも選出されている。

出会いが生んでいく、
新しく大きなビジネス。

高橋: 橋本社長は、イボキンも参画している、リサイクラー企業同士が協業していくプラットフォーム「ROSE」(ローズ)の仲間です。イボキンとは解体事業での協業も増えています。

橋本: 初めてお会いしたのも、その「ROSE」の提携調印式でしたね。その時、高橋社長が、今、高度成長期に造られた建物や道路などのインフラが老朽化し更新時期が来ているので、解体事業には大きなニーズがある。一方で、解体業界は未成熟でイボキンさんは

解体事業のゼネコンみたいな立場になりたいとおっしゃいました。

高橋: 中特さんは、遺品整理などの仕事もされていて、持ち主のなくなったお住まいをどうにかしてほしいという話があると聞いて、それなら、解体事業があればお客様のお役に立てるのではというお話ししましたね。

橋本: それで、私も解体事業に興味を持ちまして相談したところ高橋社長がいろいろ教えてくださいました。住宅の解体から始めましたが、弊社のある山口県周南市は、周南コンビナートに大きなプラントがたくさんあって、そこを解体するには、ただ壊すだけでなく安全面やコンプ

ライアンスがすごく問われますので、イボキンさんに教えていただかなくては絶対できないことでした。

そもそも、ずっとやってきたことがSDGs。

高橋: 今、どの企業も共通して取り組まないといけないことに「SDGs」というテーマがありますが、中特さんは「17の課題」を据えてやってらっしゃいますね。

橋本: たしかに、SDGsのテーマにも通じる「17の課題」を掲げて取り組んでいます。内容はずっと以前からやってきたことなんです。それは、世の中に

必要とされなければ会社の存続に意味がないという私の信条からです。社会貢献すればするほど結果的に会社の発展につながる、まさにそれがそのままSDGsだと考えています。

高橋: 地域と連携してさまざまな社会活動をしておられ見習うべき部分が多いです。ビジネスの視点で考えると「どう売上に貢献できるか」を重視してしまいがちですが、それだけでは、いけませんね。公共性の高い、社会に貢献できる姿勢や行動に興味や共感を持っていたいてはじめて、ビジネスのお話もいただけたと思います。

橋本: そうですね、たとえば私たちは「フードバンク活動」を行っています。

「賞味期限の切れていないものは捨てずに譲りましょう」という活動なのですが、私たちは廃棄物が多いほど売上が上がるのに、我々の売上がなくなり寄付のほうにいくわけですよ。でも、目の先のことを考えたら損かもしれないけど、世界の潮流から見たらモノを無駄にしないことや必要としている人たちに食べ物を提供できる仕組みでもあると考えると、今、ちょっとした売上がなくなるのとフードバンク活動をする意義と、どちらが社会的にプラスかって考えたらフードバンクのほうが絶対的にいいに決まっています。そういう風に考えてビジネスをしています。

循環型社会の
真ん中にいる誇りを



高橋: リサイクル業界というのは、そもそも社会性、公共性という意義が大きく、やっていることは昔からさほど変わっていないのですが、今、SDGsや気候変動といった課題解決の真ん中に出てこうしてるんですよ。それは、すごいチャンスだと思っています。

天然資源を使うよりリサイクルしたほうが原料や材料にするためのCO₂も減らせます。とにかく、都市資源を回せば回すほど、モノを大事にすることと地球環境が良くなるということがちょうどマッチして本当にすごい産業が出来上がりがつつあると思っています。そういう意味で、持続可能な世界をつくる一番のリーダーシップの担い手になっていくんじゃないかなと思っています。

橋本: そのように、私たちリサイクル業界は重要な役割を果たしていくわけですから、私は、この業界をもっと誇りを持てる仕事にしていきたいです。以前、北欧に視察に行った時、リサイクルの現場で働いている人たちがものすごくかっこよかったんですよ。最初、白人で背が高いからかっこよく見えるのかなと思ったんですが(笑)、実際、話をしても「社会のために、こんなに俺たちいいことやっているんだぜ」っておっしゃったのが印象的でした。日本もそうならなければいけない、5年先、10年後先に、花形系の職業にしたいと思いますよね。

発信力を高めていく ブランディングの価値



高橋: 今、お話ししているこの本社オフィスも、とても瀟洒な雰囲気、明る

く快適でとても気持ちいいです。こういう働く環境の改善も、とても大切ですね。

橋本: ありがとうございます。この新社屋は昨年から運用しています。元々は、手狭になった旧社屋の転居を考えていまして、コスト的にも社屋の建設は考えていませんでした。でも、ただの事務所だからもったいないのであって、仕事だけの単なる事務所に終わらせないものにしたらいいじゃないかと思いついたんですよ。そこで、事務所空間をイノベーションを起こせる場所にしたいと考えました。働く場所はフリーアドレスにしていって、実際、毎日違う人とのコミュニケーションが生まれていくようになっています。また、外観は、ほぼ

ガラス張り、太陽が出て沈む方向や季節ごとの風も計算して、なるべく電気代を使わないっていうのを考えて設計されています。広くとったオープンスペースでは、金融機関との合同セミナーやキッズ向けスクールなども行ったりして、会社のいろんな可能性を探る試みを実践できる場になっています。

高橋: 働きやすさや働く楽しさというものも実感できる環境ですね。弊社でも先日、新しい試みとして「ファミリーデー」を開催しました。お父さん、お母さんが働いているところを子どもたちに見てもらおうと企画しまして、社員、家族もあわせて200人以上が来てくれました。プロジェクトチームを立ち上げて意見を出し合って、ご家族にイボキ

ンの会社のことを楽しみながら理解してもらえそうなイベントをしたんですよ。実際、いつもお父さんが動かしているトラックの試乗とか、バスを解体してショーのように見せたりとか、全部のイベントをまわるスタンプラリーもしたんですね。ご家族の喜んでもられるのを見られましたし、社員も誇らしげでした。

炭素の排出量を デジタル技術で一元管理

橋本: 今後は、こういった事業を考えておられるのですか。

高橋: デジタル技術を駆使したエンジニアリング企業にならなければいけな

いと思います。これまでのように扱う廃棄物やスクラップが増えれば売上が上がるという物量に頼るだけではないと考えています。天然鉱山ではなく、建物やインフラに眠る資源を「都市鉱山」と呼んでいます。その都市鉱山から出る資源の開発から処理、再資源化、出荷までを高度なデジタル管理のもと一貫して行うことを考えています。それができれば、カーボンニュートラルに向けての排出炭素量を廃棄の分まで含めて定量化して明確に提示できます。これは、解体から、産廃、再資源化、最終処分までをひと通りできるイボキンだからできることです。まさに、新しいスローガンである『資源の一生に、夢と責任。』を実践する事業として、認知、

理解されていくようにしたいと考えています。

橋本: カーボンニュートラルといえば、私は新エネルギーにも着目しています。山口県のコンビナートが並ぶ海岸沿いには、多くの風力発電のための風車が多く設置されておりますが、高橋社長のほうでは風車の解体も手がけられていますよね。

高橋: 風車も更新時期が来ているものが多くあり、昨年、洋上の風力発電設備の解体を手がけました。太陽光発電も含め、新エネルギーに関連する設備は、これからどんどんリプレイスの時期がきます。



橋本: ここ山口県の風車の解体、それにコンビナートのプラント解体も、お互いの強みを生かして、何かまた新たなものができれば面白いと思っています。経営者として、ああいうことをやりたい、どうしたらいいんだろうって思いますが、こうして先に志がご一緒の方と出会ってお話をしているうちに、じゃあ、これ一緒にしようっていう方がうまくいくような気がしています。

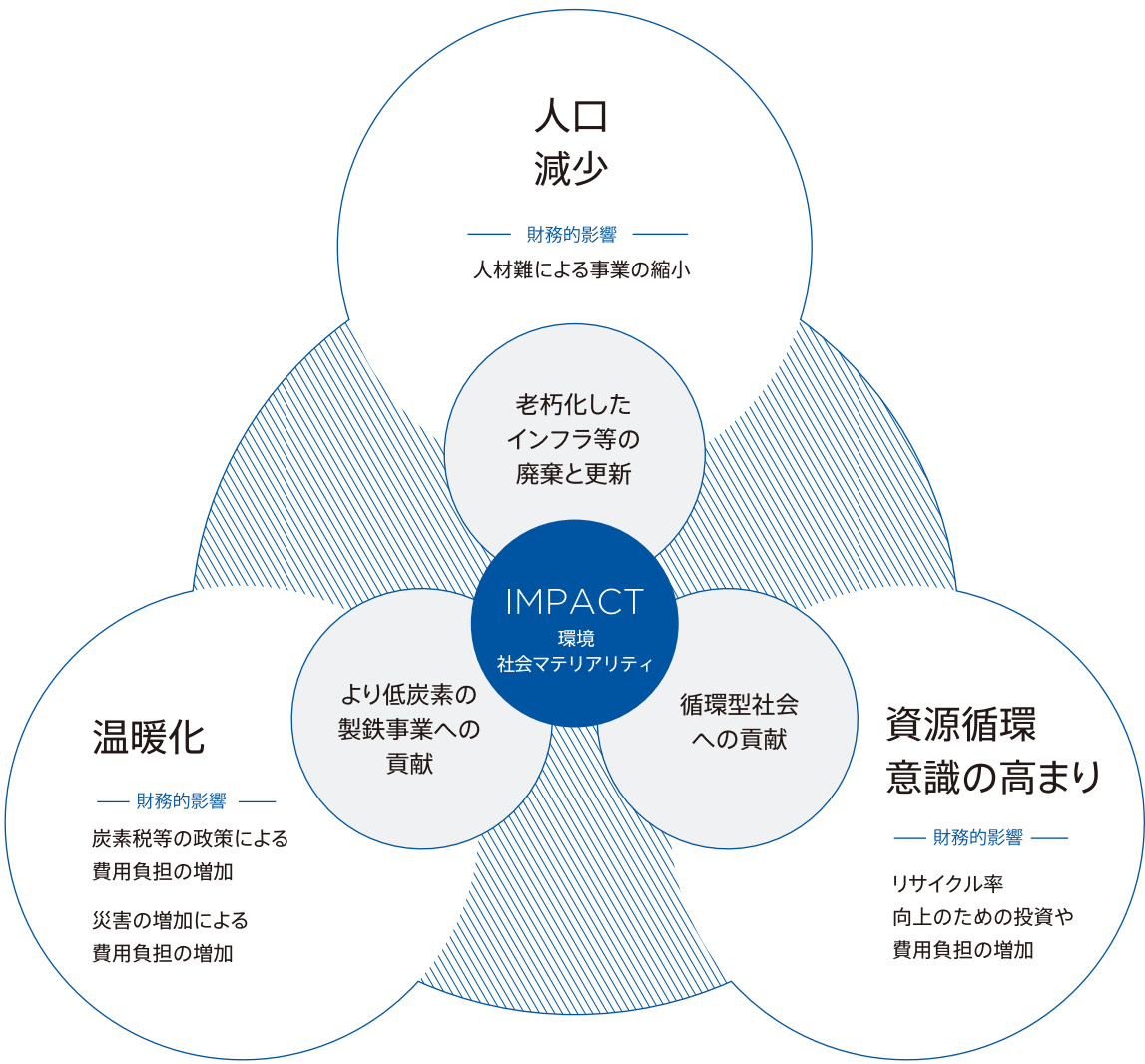
高橋: その通りだと思います。お互いの発展、業界の発展のためになることはもちろん、時代が求める持続可能な社会を創っていくことに貢献するために、これからも切磋琢磨していければと思います。本日はありがとうございました。



Sustainability

イボキンESGへの取り組み

イボキンでは、人口減少、資源循環意識の高まり、および温暖化の3つの長期トレンドがリスクや事業機会になると考え、これらに対応するアプローチで長期戦略の立案を行っています。



マテリアリティ

イボキンでは、サステナビリティを経営の柱と考えており、中でも資源の循環、地球温暖化への対応、及びウェルビーイングの3つをマテリアリティ(最重要項目)としています。

資源循環	資源リサイクル企業として、廃棄物の適正処理を通じた資源循環は私たちのパーパスです。イボキンでは焼却・埋立による環境負荷を低減させるための取り組みとともに環境負荷の見える化を進めています。
脱炭素への対応	鉱物資源由来の素材からスクラップ由来の素材への転換に寄与することで二酸化炭素排出量の削減に貢献するほか、事業の過程で排出される二酸化炭素の削減も進めています。
ウェルビーイング	社員が活躍できる場を提供することがサステナブルな経営の基礎となるとの信念から、社員本位の取り組みを進めています。

Reduction of CO₂ emissions

受入廃棄物の処理に係るCO₂排出量の算定

脱炭素に向けた取り組みが進み、大手企業を中心に製品ライフサイクルを通しての二酸化炭素排出量を算定するトレンドが広まっています。イボキンでは、主にメーカー様の生産活動や営業活動から生じる廃棄物やスクラップの中間処理を行っていますが、その過程で生じる二酸化炭素は、メーカー様にとって、事業から出る廃棄物(スコープ3 カテゴリー5)、および販売した製品の使用に伴う二酸化炭素排出量(スコープ3 カテゴリー12)に当たります。イボキンでは当事業場内における二酸化炭素排出量を毎月算定しており、メーカー様に対しても情報提供の準備を行っています。今後はさらに精度を高めてメーカー様の脱炭素の取り組みを支援してまいります。

再エネ100宣言 RE Action

イボキンは、2021年度より「再エネ100宣言 RE Action」に参加しています。
再エネ100宣言 RE Actionとは、企業、自治体、教育機関、医療機関等の団体が使用電力を100%再生可能エネルギーに転換する意思と行動を示し、再エネ100%利用を促進する新たな枠組みです。
イボキンはリサイクル事業を通して地球環境の保全に貢献することを使命と考えておりますが、事業の遂行に伴って使用するエネルギーについても、より環境に配慮したものに切り替えてゆく予定です。このたびイボキンは、「再エネ100宣言 RE Action」の枠組みを通じ、2030年末までに、使用電力をすべて再生エネルギー由来のものに切り替えることを宣言しました。今後一層地球環境の保全に貢献してまいります。



Resource circulation

全国のネットワークを活かした廃棄物のリサイクル

イボキンでは、自社工場にてさまざまな廃棄物の破碎、選別、圧縮等の中間処理を行っていますが、工場では処理できない種類の廃棄物についても、お客様から相談があれば協力会社のネットワークを活用して、処分の道筋を示すソリューションサービスを提供しています。お客様に対して、経済性と環境負荷低減の両面を考慮した提案が可能となっており、ご希望に応じた処理の選択肢を示すことができます。また、処理委託費を支払い、廃棄物として処理するほかないとお客様がお考えだったものでも、資源化できるパートナーを見つけることでお客様から有価物として買い取らせていただけるよう努めています。



Well-being



2022年10月22日にイボキン初の試みとしてファミリーデーを開催

イボキンに勤める社員のご家族に、「パパやママが働く職場を実際に見てもらい、身近に感じてもらいたい」「日頃伝えられない感謝を家族に伝えられるきっかけに」をコンセプトに企画運営を行いました。

当日は、社員全員で社員のご家族やご友人等、200名を超える来場者をお迎えし、当社の工場内をご覧いただきながら、トラック・重機の試乗体験、スタンプラリー、バス・車の解体ショー、ハンドメイドコーナー、お野菜マルシェなど様々なイベントを開催し、盛りだくさんの一日となりました。子どもたちのたくさんの笑い声を工場で聞いたのはとても新鮮で、笑顔溢れる素敵な一日となりました。

イボキンでは、今後も社員のご家族とのつながりを深めるとともに、社員同士のコミュニケーションを活性化し、活気ある職場づくりを進めてまいります。

Work style reform

こどもミュージアムプロジェクト トラックお披露目式

株式会社宮田運輸様主催の取り組みで、交通事故を1件でも減らしたいという思いから発足した「こどもミュージアムプロジェクト」に当社も参画させていただきました。こどもミュージアムプロジェクトとはトラックに子どもの絵をラッピングすることで、トラックを運転するドライバーだけでなく、トラックを見た周りの人も優しい気持ちになり、安全運転を心掛け、心のゆとりを取り戻すことで交通事故を少しでも減らすことを目指す取り組みです。

イボキンでは、社員のお子様19名から21作品の思いのこもった絵をご提供いただいてトラックにラッピングし、素敵に仕上がったトラックをファミリーデーの開会式の際にお披露目をさせていただきました。これからも事故撲滅に向けて全社で取り組んでまいります。



Management meeting

経営会議・合宿

イボキンでは2020年度から取締役会の実効性評価を実施していますが、その中で今後議論を深めてゆくべき項目が識別されました。これを受け、役員によるディスカッションを活性化させるため、経営会議を毎月開催し、個別の論点に関し議論を行うようにしています。また、2022年7月には、役員を中心に泊まり込みの合宿を実施し、イボキンの長期ビジョンについて意見交換や議論を行いました。



INTERVIEW

「工業化とともに発展してきた日本と青空の関係」を考えることが、真のサステナビリティ社会の形成につながる。

サステナビリティという言葉の意味をどの様に捉えるべきなのでしょうか？

直訳すれば「持続可能性」。その意味するところは「環境・社会・経済」の観点から、今後地球環境を壊さない経済活動を維持し続けることとされますが、皆さんはこの単語と意味とが上手く連動出来ているでしょうか？恐らく、その両者を丸暗記されている方も大勢お見えになるのではないかと思います。

私は1986年1月から大凡1年半、前職の社命を受け中東の内陸特有の過酷な気候が続くイラクに駐在したことがあります。非常に眩しく記憶に残っているのが「青空」です。それも今の日本では中々見られない本当の真っ青な空が毎日続きます。

でもこの空が、この真っ青な空が、過去には日本にも東京にも確かに有った…

日本は、戦後の復興期から経済的には高度成長を遂げました。その中核を担ったのが世界の工場と言われる工業化の推進です。これに伴い日本中が経済的に潤い、便利になり、世界中から羨望の目差して見られる国へと発展し、先進国の仲間入りを果たしています。

でも今はそれ以上に、空の先に温室効果ガスなるものでまで滞留させている…

サステナビリティという言葉の意味は、例えて言えばこの東京の大発展と、その結果？として失われた本物の青空との関係をよく考えて次代に活かせと言うことかもしれません。

失われた環境を取り戻すことは大切なことだけれど、今それと同時に大切なことは、自らの目標に向けた今後の活動が、直接的な効果だけに目を奪われることなく、副次的効果・影響にも留意し、環境にも配慮された本物の発展を目指すことにあるのでしょうか。

副次的効果・影響にも目を配るからこそ我々社外取締役の存在も活かされる。

それが自然に出来る会社で有りたいと思います。

橋本 法知

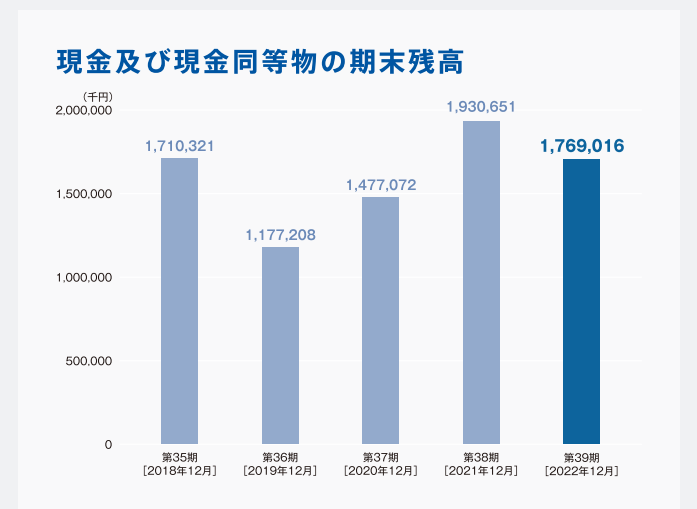
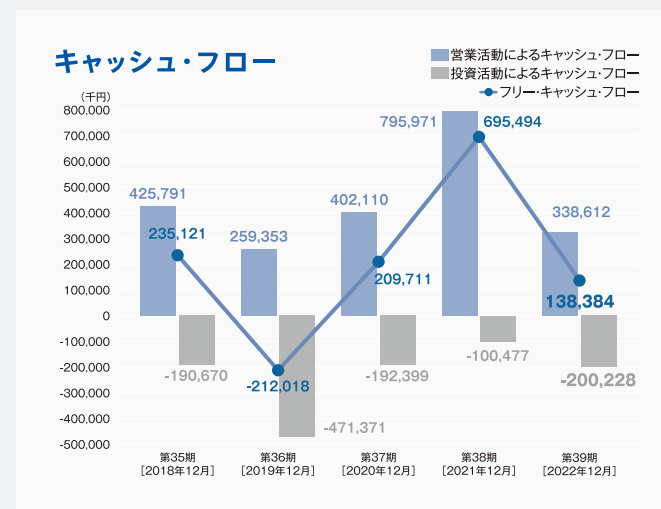
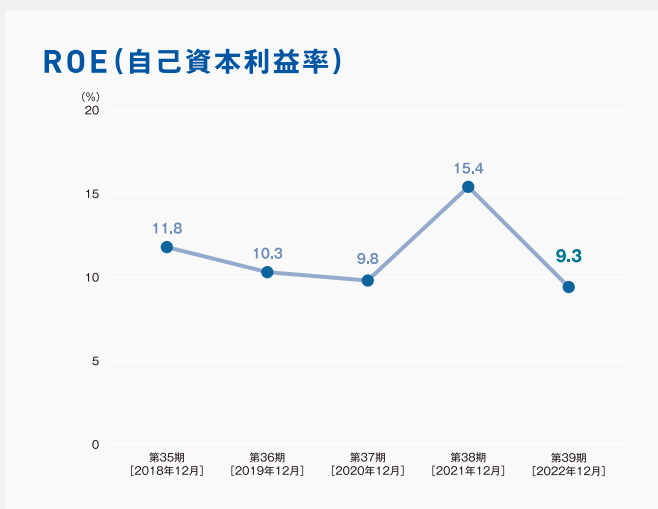
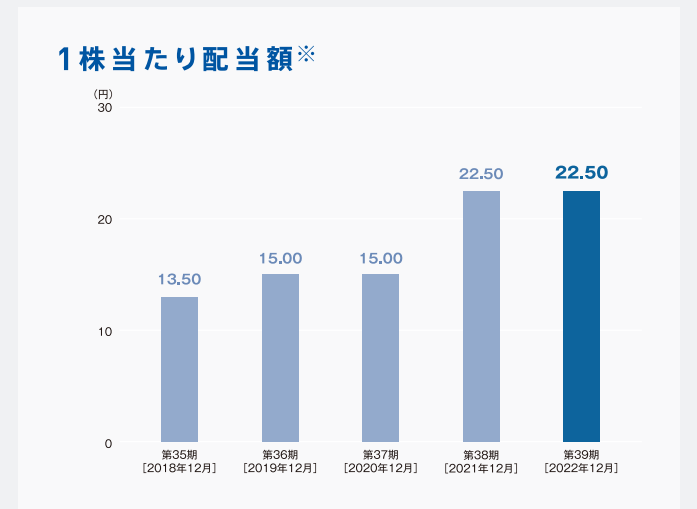
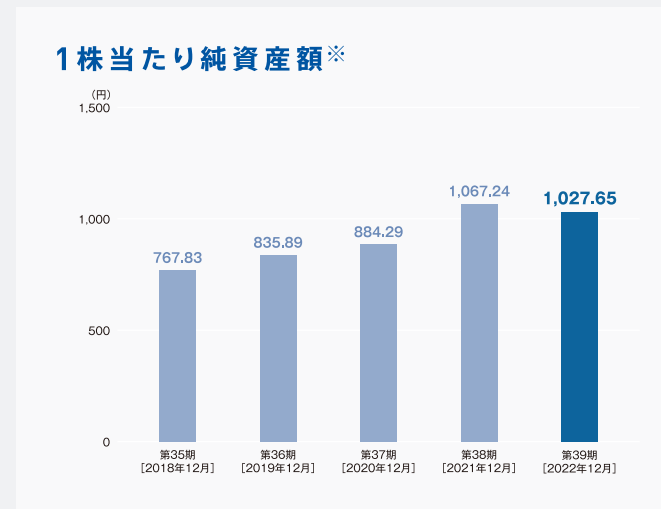
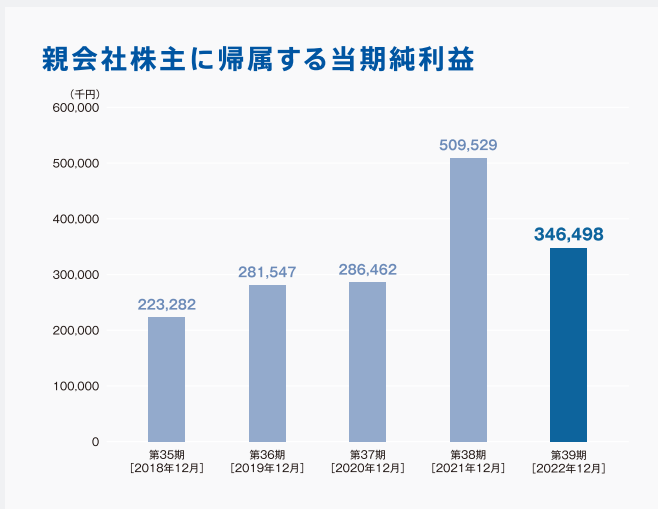
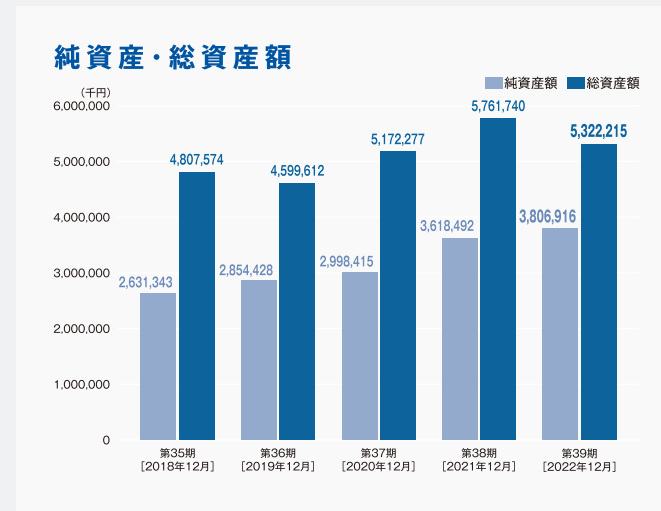
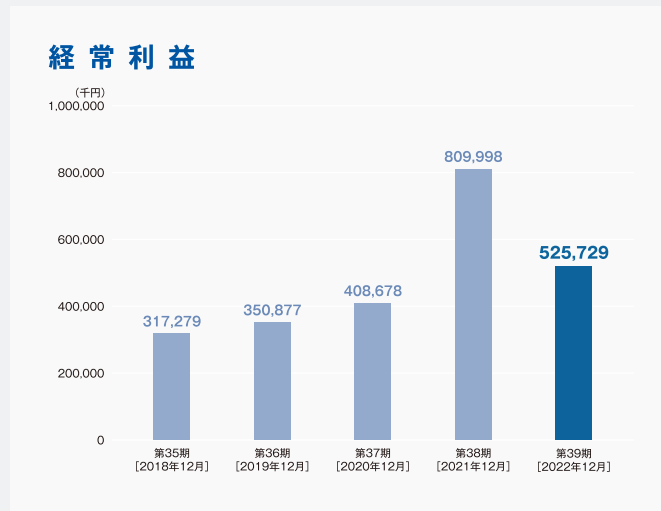
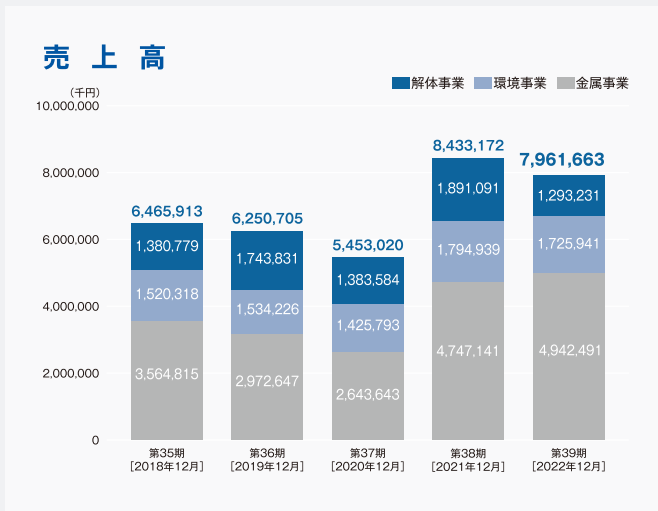
Noritomo Hashimoto
社外取締役



Financial report

財 務 報 告

※ 2018年3月30日付で普通株式1株につき2株の割合で株式分割を行い、2022年1月1日付で普通株式1株につき2株の割合で株式分割を行っております。
これに伴い、第35期の期首に当該株式分割が行われたと仮定して、1株当たり当期純利益、1株当たり純資産額および1株当たり配当額を算定しております。



Number

数字で見るイボキン

社員数（連結）



149人

平均残業時間



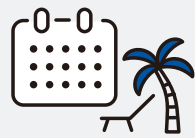
18.6時間

平均有給取得率



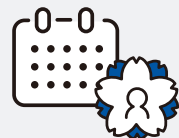
65.4%

平均有給取得日数



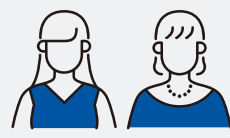
10.1日

平均勤続年数



7.0年

役員における女性割合

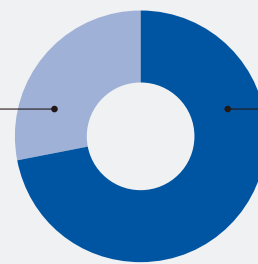


12.5%

男女比率（連結）



女性
28%



男性
72%

職種別比率

事務員

33%



営業

25%



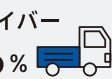
作業員

26%



ドライバー

16%

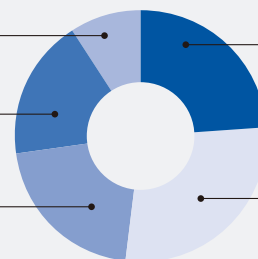


年齢構成

60歳～
9%

50～59歳
18%

40～49歳
21%



～29歳
24%

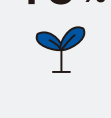
30～39歳
28%

新卒・中途の割合

中途
85%



新卒
15%



Information

会社概要

社名	株式会社 イボキン
本社	兵庫県たつの市揖保川町正條379番地
代表者	代表取締役 高橋 克実
設立	昭和59年
資本金	130百万円
年商	7,962百万円(令和4年12月期)(連結)
従業員	(連結)149名(単体132名)
事業所	本部ビル/本社工場/龍野工場/阪神事業所/ 東京支店/福島支店/PMR工場/最終処分場

営業品目	1. 鉄、非鉄スクラップの収集運搬、加工、リサイクル 2. 一般廃棄物の収集運搬、中間処理 3. 産業廃棄物の収集運搬、中間処理及び最終処分 4. 特別管理産業廃棄物の収集運搬 5. 自動車リサイクル 6. 建築物解体工事 7. 高度管理医療機器等の売買及び貸与
------	---

工場・事業所



本部ビル〈管理本部・解体工事業部〉
〒671-1631
兵庫県たつの市揖保川町山津屋140-14
Tel.0791-72-5088 Fax.0791-72-7400



本社工場〈環境事業・運輸部〉
〒671-1621
兵庫県たつの市揖保川町正條379
Tel.0791-72-3531 Fax.0791-72-2639



龍野工場〈金属事業・ELV部門〉
〒679-4155
兵庫県たつの市揖保町揖保中198-1
TEL 0791-67-2525 Fax.0791-67-2828



阪神事業所
〒660-0095
兵庫県尼崎市大浜町1-31-1
Tel.06-6411-3300 Fax.06-6411-3307



東京支店
〒101-0047
東京都千代田区内神田2-16-11-304
Tel.03-3254-2525 Fax.03-5294-2525



福島支店
〒979-1151
福島県双葉郡富岡町大字本岡字王塚590-16
Tel.0240-22-8383



PMR工場〈PMR部門〉
〒679-4155
兵庫県たつの市揖保町揖保中341
Tel.0791-67-0500 Fax.0791-67-2727



株式会社 国徳工業〈グループ企業〉
〒590-0984
大阪府堺市堺区神南辺町1-54-1
Tel.072-225-1707

環境方針

当社は、資源の少ない我が国に於いて、都市鉱山開発企業として最先端の技術力、ノウハウ、安全性を追求し、持続可能な資源の有効活用を通じて社会に貢献する。当社は、日本の美しい自然環境を未来に残し、「もったいない」の心を社会に広める事を使命とする。本方針は一般に公開する。

1. 環境関連の法規制並びにその他の要求事項を徹底遵守する。
2. 解体、分離、選別技術を研鑽し、リサイクル率の向上に努め廃棄物の製品化による自己完結型のリサイクルを目指す。
3. 製造技術、流通システムを研究開発し、より良いサービスを広く提供する。
4. 定常業務はもちろん、非定常業務及び事故等の緊急時に於いても汚染予防を徹底する。
5. 本方針遂行のため、環境目標を設定し、必要に応じて見直し、環境パフォーマンスの向上のため、環境マネジメントシステムの継続的改善を推進する。
6. 当社環境方針に沿った行動を行うように、全従業員及び当社の為に働く全ての人に周知する。

時代の変化とともに、 イボキンは進化し続ける。

イボキンは、1973年からいくつものターニングポイントを迎え、その度に進むべき未来に向けた道を選びここまで進んできました。ここでは、イボキンが今までに迎えた転換点をご紹介します。

1973



昭和48年

個人事業主から高橋商店へ。そして、株式会社として新しいスタートを切る。

兵庫県相生市で金属スクラップの個人事業を生業としてきましたが、高橋勇史が1973年に高橋商店を創業しました。当時は鉄をはじめとする金属スクラップ事業に注力しました。その後、規模拡大のため、1984年に揖保川金属株式会社を設立して法人化しました。

1980



昭和55年～平成6年

スクラップディーラーとしての基盤確立。同時に、廃棄物処理業への許認可準備。

1980年代後半、バブル経済とともにスクラップの流通も増加する中、スクラップ加工問屋としての基盤を確立しました。不法投棄等が社会問題化するなか、当社は産業廃棄物収集運搬業及び中間処理業許可を取得しました。さらに1994年10月には産業廃棄物最終処分場を設置して最終処分業許可を取得し、一連の業務を一貫して扱える体制を築きました。

1990



平成2年～平成12年

リサイクル事業へのシフト。

バブル崩壊後不況が長期化し、鉄スクラップ価格は大きく下落、業界全体として鉄スクラップ処理だけでは採算が合わなくなりました。一方、1998年に特定家庭用機器再商品化法(家電リサイクル法)が制定されリサイクルの機運が世の中に高まる中、当社は鉄スクラップ依存から脱し、いち早くリサイクルに対応できる体制へのシフトを進めました。

2002



平成14年～15年

環境事業、解体事業が本格スタート。総合リサイクル企業、イボキンへ。

2002年10月龍野工場を開設、スクラップ業務を移し、産業廃棄物処理を本社工場に集約しました。環境事業の本格的な始まりです。解体工事もスタートし、総合リサイクル企業へと歩み始めました。業容の変化を受け、お客様や地元の皆様から「イボキンさん」の愛称で呼ばれていたこともあり、2003年10月に商号を現在のイボキンへ変更しました。

2013



平成25年

小型家電リサイクルへの対応。処理できる廃棄物の大幅な拡大。

2013年6月に経済産業省及び環境省より、小型家電リサイクル法に基づく再資源化事業者の認定を受けたことにより、お客様の建物内部にある産業廃棄物はほとんど取り扱うことができました。

2015



平成27年

7社包括業務提携による、地域に縛られない解体工事への挑戦。

当社の解体工事は運搬上の限度から地元案件が中心でした。そこで2015年6月、スズクホールディングス(現 TREホールディングス)、エンビプロホールディングス等の各地域の有力リサイクル企業6社と7社包括業務提携を締結しました。提携先と協力して受注し、当社が解体案件の施工を担い、排出されたスクラップや廃棄物は提携先で処理をする協業が可能となりました。こうして地域の制限を受けず解体工事を受注できるようになりました。

2016



平成28年～令和4年

グループ体制の強化。そして、上場へ。

2016年1月に持株会社であった日之出開発株式会社を吸収合併し、2017年4月には、解体事業で長年の協力関係にあった株式会社国徳工業を100%子会社化しました。そして2018年8月、東京証券取引所JASDAQ(スタンダード市場)へ上場しました。今後、解体から最終処分まで自社完結できるワンストップサービスを一層推進させてまいります。

2023



令和5年

新たなスローガンとロゴマークとともに、未来へ。

時代のニーズに応えるために、イボキンには何ができるのか。社内ではブランディングチームを立ち上げ、当社の提供価値やアイデンティティを改めて見つめなおしました。そして、目指すべきビジョンを言語化し、スローガン「資源の一生に、夢と責任。」とロゴマークを開発しました。新たなコーポレートブランドとともに、日本一のリサイクル企業を目指すイボキンにご期待ください。

HISTORY